

あさひくん、プロローグ

せみの声が遠い。

パパにぶたれたほっぺただけがジンジンと熱くてひりひりする。

今日はぼくの算数のテストが100点じゃなかつたから。

98点だったから。

だからお家に入れてもうえない。

お日様はどうぞ沈んでいく。

世界の中から放り出されたみたい。僕はひとりぼつちだ。

僕が悪いから、悪いんだけど、僕が。テスト100点取れなかつたから、悪いのは僕の
はずなんだけど。

それはちゃんと分かつてゐるのに、涙が止まらない。

誰も、誰も、誰も僕を抱きしめてくれない。

ああ、せみの声が遠い。

「どうしたの。」

ぬるい風に乗って僕の耳に届いた柔らかい声。

びっくりして顔を上げると僕よりも小さな女の子が立っていた。

「…誰、君…。この近所の子…? もうこんな時間なのに…。」

外で遊ぶにはもう随分日が傾いていた。

「こんなに小さいのに…。

…ひょっとすると、この子も一人ぼっちなのかな。

そうだったら僕たち、お友達になれるかもしれない。

「もしかして…、君もおうちに帰るとパパやママに怒られるの…?」

縋るような思いで問い合わせると、女の子は小さな頭を可愛く横に振った。

それから一生懸命自分がなぜこんな時間まで公園にいるのか説明してくれた。

「……そう。…ママもパパもお仕事で遅くなるから…今日だけ…、ね…。…ふーん。」

「なんだ。なんだ、やつぱり。一人ぼっちは僕だけなんだ。

パパもママも、名前も知らないこの子も、僕の傍にいてくれない。

せり上がりってきた涙を堪えようとしたらいぶすん、と鼻が鳴った。

すると女の子は持っていた花柄のポシェットを「ヤヤヤヤ」と探り、幼い手を僕に差し出しついた。

「…ん? 何?」

開かれた温かそうな手の平の上には。

「…絆創膏…?」

テレビで見慣れたキャラクターがくついた絆創膏が一枚。

涙で濡れた顔を上げると、心配そうな瞳と目が合つた。

あ、かわいいな、この子。

「…」れ…、僕にくれるの?」

その子は何度もうんうんと頷きながら、痛いのとんだけ、と一生懸命おまじないをかけてくれた。

僕、テスト100点取れなかつたの。」

「あ…。…違つよ、じいじが怪我してない。…痛そりに見えてる~。」

うん、といつても痛そりだよ、と戸惑いながら僕の質問に答える可愛らしい声に胸のところが
いっぱいになる。

絆創膏を受け取ると指先がじんわりあつたかくなつていつた。

「…あつがとひ。…お家にこもっては怪我するけど、…絆創膏なんてもうつた」と
ない。…あつがとひ。」

不思議だな。わつわつと寂しくて寂しくてどうもなかつたのに。

ママだつてテストで100点を取らないと抱つこしてくれないのに、この子は、ママがわざ
こない、の僕を心配してくれて、絆創膏をくれて、おまじないまでかけてくれた。
この子、この子なんだ、きっと。

ママでも、パパでもない。

この子なりもつと僕の事を本当に好きになつてくられるかもしねり。

100点取らなくつても、僕をぎゅってしてくられるかもしねり。

「…ねえ、明日ちかいいに来る~来てよ。遊びよ、僕と。」

この子を誰にもあげたくない。

僕が独り占めしたい。

だつて、だつて僕にはこの子しかいないんだもん。

僕に絆創膏をくれたのはこの子だけなんだもん。

あ、そうだ、この子にお嫁さんになつてもらえればいいんだ。

すつぐくいいかもしない。

ママやパパじゃなくて、この子と家族になつたら僕、もう一人ぼっちじゃなくなる。
うん、すつぐくいいな。

「僕は…あきり…、…いや、にーにって呼んでいいよ。」

にーに~と小さく首を傾げる仕草にどきんと心臓が跳ねる。可愛い。

「ね、ね? 明日も遊びよ。絶対にで会おうね。」

お願ひ、僕をもう独りにしないで。